

# やはり生徒がいてこそその学校

夏休み中は、確かに私たち教師にとっても、いつもよりはのんびりできる時間です。定時に出勤して定時に退校できる唯一の期間です。休みの前半は、ほっとした気もちで仕事に取り組んでいたのですが、後半になるとやはり何か物足りなくなってきました。

私は、定時に帰って、野良仕事をしたり家のことをやったりしていました。普段できないことに平日から取り組めることはありがたいのですが、「働いているんだ！」という手ごたえはありません。それはなぜか……生徒と接していないからです。

私たちは、教師になりたくてなりました。生徒たちの人間形成に携わりたいと思ったから教職に就いたのです。「学校はブラックだ」と言われても、生徒がいれば勤務時間関係なしで寄り添いたいという気もちがあります。仕事は確かに楽ではありませんが、生徒のためと思えば、無理を知らないうちにやってしまうのが教師です。これは教師の性(さが)と言えるのかもしれませんが。

生徒が学校にもどってきました。教室を見て回ると、卒業までの見通しを真剣に聴く三年生、夏休みの研究を照れながら話す二年生、そして、久しぶりの再会に笑顔を交わす一年生の姿がありました。そして、その中には生徒たちに正対する担任の姿がありました。いつもの光景ですが、これが妙に尊く見えて、「やはり生徒がいてこそその学校だ」としみじみ思っていました。

「おはよう！元気があったかい？」  
「はい。先生もお元気そうですね。」

朝の登校時のすれ違う瞬間に、ある生徒とこのような言葉を交わしました。何の変哲もない会話ですが、私は久しぶりにうれしくなりました。夏休み中に出会う人とは交わすことがなかった言葉です。生徒との間だからこそ生まれたほのぼのとした感覚に、改めて「学校っていいなあ」と思いました。

スポーツにオフシーズンがあるのは、ただ単に体を休めるためだけではありません。オフシーズンがあるから、シーズン中にどんなにづらい練習をしても、再びそのスポーツが恋しくなってくるのです。「早くボールを投げたいなあ」「もう少ししたらコートで練習できる」などと、次のシーズンに向けてのモチベーションもどんどん上がってくるのです。

夏休みも同じです。四十日間の夏休みは確かにのんびりできませんが、休み明け後の学校生活のモチベーションを上げるためにあるような気がします。本日体調がすぐれず欠席した生徒もいました。出会った生徒たちはいい顔をして登校してきたように見えました。生徒たちは「もっと休みがあるといいなあ」と言うものです。しかし、それは、学校がある時にはそれだけ頑張っているということ。休みは恋しくても、足が自然と向く学校にしたいと改めて思った初日でした。